

遠藤隆吉「漢文日記」について（上）：『過眼則
録』第三十八冊

町田，三郎

<https://doi.org/10.15017/2328482>

出版情報：哲學年報. 52, pp.51-80, 1993-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



遠藤隆吉「漢文日記」について（上）

— 『過眼則録』第三十八冊 —

町 田 三 郎

はじめに

明治・大正・昭和の三代にかけてわが国の思想・教育界に絶大な業績を遺した遠藤隆吉（一八七四～一九四六）の生涯に關しては、すでに蝦名賢三『遠藤隆吉伝—菓園の父、その思想と生涯』（西田書店）及び拙稿『遠藤隆吉覚書』（九大哲学年報49輯）に詳しい。かれは昭和十年ころから半紙二つ折りの「菓園用紙」にのびやかな筆で全て漢文による日々の記録『過眼則録』四十冊を書き残していた。当時の政治・社会状況から日常の些事に至るまでの記録である。貴重な資料であったが一部は昭和二十年の東京大空襲で焼失し、一部は戦後の混乱の中で失われ、現存するものは僅かに第十冊（昭和十三年五月十六日～七月十三日）第二十八冊（昭和十七年六月八日～十二月一日）第三十八冊（昭和二十年八月一日～十月十六日）第三十九冊（昭和二十年十月十七日～十二月三十一日）第四十冊（昭和二十一年一月一日～二月一日）の五冊のみで、これも現巢鴨学園理事長堀内政三氏が戦後の混乱期にいまにも廃棄されんとしたところを見出し丁寧に保管されたものである。

以下には第三十八～四十の最晩年の日記を書き下ろし文として掲げた。この時七十二才。当時かれが作りあげた菓園は、中学も経専も東京大空襲で全て焼失していた。津田沼に半ば隠棲していたかれにとつては、学園再建が急務であった。重い課題であった。

起八月一日（二十年）

過眼則録

第三十八冊

八月一日（一） 晴 冷気なお減せず。將に秋に入らんとするなり。躑躅前庭に紅なり。唐茄腐朽し、玉葡黍未だ熟せずして葉黄色を帯ぶ。梨子一顆を留めず。西瓜悉く蔓を辞すと云う。今朝、余襦衣に外套を被る。噫、今年は何の歳ぞや。數百年來これ有るを聞かざるなり。昨日、午下、鍼經功（三）を止む。龍頭を捻ずるに止まる攸なし。今日繕修家殆んどこれあるなし、嗟呼。青僚、石室階上の壁を穿ち、梁の孔を貫く。平（山）生、長原に使いし、明（三）及び余の菓餌を購う。又石井修三（四）を訪ねしむ。郵便局長來る。山洋の乳を呈す。又羽成石匠の電を托寄す。泰子（五）、弘子を伴いて來る。齊氏（六）多弁にして善く人を嘲る。巾櫛人（七）泣く。此の日始めて玉葡黍一幹を採る。未だ熟せず。此の日午後、暑気大いに張る。

二日 晴 明鏡院（三）の祥月命日なり。奠獻の物なきを悲しむ。昨夜、空襲警報。起き出でて村農の家に就き、拉地輿（オ）を聴くに、川崎を襲撃する者の如し。蓋し午にして寢に就く。泰子報じて曰く、了れりと。朝、泰子帰り去る。暑気張る。此の日、身体の硬直すること尋常に非ざるなり。齊氏の言、往々にして人の意に触る。不快なること甚し。

三日 晴 暑威大いに張る。弘子來りて明の病を看る。青僚・村農、疊を藻井（テンシヨウ）の裏に積む。子瀧（九）・子清（十）來る。子瀧言う、某を教授と為すこと如何と。先に辞去す。子清、布団家を待して來る。赤羽坊（チ）の高橋氏、子清を介す。人をして布団を撥び來ること二十枚、蚊張三張。子清辞去す。朝、水沢伍長來る。領書を付して薯三俵を乞う。伍長唯々として退去す。午後下痢。

四日 晴 暑張る。昨日、正秋¹¹印章二個を齎す。一は大にして巢鴨学園と曰い、一は小にして巢鴨学園総裁印と曰う。併せて金二百六圓。朝、齊氏、黒津を遣る。平（山）生をして田博士¹²に使いし、其の来診を乞わしむ。又青儻を泰子に使いし、村農を巢鴨に使いせしむ。午、田博士・澄子来る。震及び泰子、余を見ず。近藤等も亦た来る。平（山）生帰り来り、二三日の暇を乞い以てその身を養わんと。之を允す。明、切に苦惱を訴う。辰を過ぎると半鍼、終に絶命す。余臨終の下に会せんと欲するも、動顛して倒れ、肋骨及び臂、臀を傷つく。噫、明は脳髓明敏なることに過ぐ。惟だ憾むらくは家庭夜三更にして客を会し飲食す。明も亦た為に感化し、終に大患を致す。昨年、余病院に在り、田博士・正秋・子成等に囑して、病院に入らしめ、氣胸療法を行わしむ。明、入院すること三十日、余に告げずして退院せり。余又何をか言わん、唯だその死に臨みて懊悩の状を視るに、誠に憫れむべきなり。此の日、直竹来る。

五日 晴 青儻を田博士に使いす。村農・黒儻、奔走して頗る力めり。埋葬許可証の事、（黒）儻主として之に当る。火葬場の事、村農之に当る。（青）儻は則ち棺を造る。夕、納棺す。

六日 晴 暑愈いよ張る。空襲ただ近きに至る。澄子・泰子帰京。巾櫛人、加津女・青儻の婦を伴い、大久保にゆき、豆腐及び糟粕を領して帰る。二氣¹³、大沢大尉と相語り、酒を乞う。午に垂んとして、震、遺骸を奉じて帰る。此れより先き澄子・泰子、行季を擔いで辞去す。午下、空氣蒸すが如し。余は石室の二階に在り。是を以て稍や涼し。齊氏、悪口雑言して余を罵りて已まず。余、黒津・儻を召して某事を語る。青儻の婦ら皆なその荒誕を嗤う。之を聞き齊氏、黒・儻に説きて曰く、初め津田沼の地を買うに、田村老人の功多きに居る。然るに恩を忘れて顧みる儻なしと。余曰く、余田村老人に与うるに畝四百九十七坪及び一百廿坪を以てす。又老衰して職に耐えざるの後二年餘、なお俸を給せり。老夫人固く辞す。二月歿するに校葬を以て佛事を営む。その子秀雄君、深く以て徳と為し、今に至るも往来絶えず、何に道りてか恩を忘れんやと。齊氏又曰く、震は天資正直、人皆之を信ず。主人は則ち公私混合、人

焉を信ずる者なしと。余曰く、齊氏災禍以後、自ら進んで會計課長となり、金銭の出納私意に出で、財団に報告せざること、忘の至りなり。近ごろ田博士之を戒む。是を以て終に窮策を案じ、罪を余に帰せんと欲する耳と。齊氏又曰く、城田・岡本・主人・震の四人、校金を分取せんとす。震、肯かず。城田、震の欺むべからざるを見、終に辞職す云云と。余曰く、嗟、是れ何の言ぞや。余、岡本を戒めて曰く、阿堵の物(は)の事、言う勿れ。人知らずとも、二人知らば則ち世皆之を知るなり。震嘗て百圓を費やす。過ぎたるは及ぶべからず、再びする勿れと。事情此の如し。城田何をか知らん、之を知る者は岡本一人のみと。岡本も亦た言う、当に財団に納入すべきなりと。百情此の如し。齊氏の妄言、殆ど常人の業に非ず。出牛君訪ぬ。

七日 晴 暑気張らんと欲するも、秋の冷氣既に草木の間に催す。拂曉起きて薯を洗う。熱火もて之を煮る。薯は他の奇なけれども、但だ胡瓜は軟くして味の以て食用に当つべきなし。一昨日、幸八麦一俵を持ち来り、牛一頭に交換せんことを乞う。之を允す。宮川某来りて曰く、城田先生と約し、辰を期して此に会せんと。既にして子清来り、某と布団を数う。凡そ一百三十枚、蚊張二十二張。田博(土)来り弔う。張替一郎(は)来り弔う。子清曰く、昨日前橋に至り、空襲の状(は)を視察す。神明坊(ま)を訪ね、令姉以下皆恙なし。姉氏の遣(つ)わす彼の牡丹杏を齎す。余嘗て之を欲し、口禁ずること克わず、一頭を嘗む。一顆を各々子清・巾櫛人に与う。橋本氏来り弔う。夕、正秋来り弔う。余その無事を祝し、共に殮す。辞去す。齋氏、張替氏を訪ね、悪口雜言、口に任せて出ず。憫れむべきかな。此の日、試みに薯を煮る。森内氏に就き、鰻を領す。

八日 暗雲低迷、大暴風雨、將に至らんとす。几上の牡丹杏、味忘れ難く、饜に先ちて一顆を喫す。蓋し果実は身の衛養に於いて第一たればなり。余為に吾が約を變じ、三食時以外、果実のみ独り得るを稍食と為す。然れども量を過ぐれば則ち身に害あり。戒めざるべからず。朝、天全く晴る。増淵子瀧来る。唐茄の園より産する彼を覓る。校事を語り、辞去す。水沢伍長来りて曰く、枝豆を献せんと欲するに如何と。余曰く、可なりと。岡本子直(は)来り、共

に午食す。松本子昇来り弔う。夕、空襲警報至る。

九日 晴 暑し。此の日、明の初七日の忌に丁る。邸内の関係者来りて厨房の事を助く。午後、子清来る。戌のとき席を設け、関係者を招きて供養す。席に即く者、橋本夫人・齊氏・子清・震・黒信夫妻・青僚夫妻・村農の女加都・弘子。蟹の油炒め・南瓜・枝豆・豆腐・淡汁・米飯に藻・酒・炭酸水・麦水を副う。時局下、意の如くするを許さず。幹旋して僅かに此の少し許のものを得たるなり。子散・震泊る。宅間君来りて、鍼經を齎す。乃ち余の托して以て繕修する彼のものなり。曰く、鍼經匠、僕の為に急ぎ此の業を作す。且つ曰く、良經は得難きの物、特に玻璃は再びし難し。先生の愛用するを可と為すと。君、佛のために焼香して行る。日露開戦を聞く。

十日 晴 齊氏・震、遺骸を奉じて行る。黒信・青僚送りて東京に到る。村農柩を搬びて張替氏に至る。齊氏將に去らんとして、悪罵嘲笑、口を突いて出ず。その暴戻言うべからざるなり。一首を賦して曰く、嗚呼、快なる哉快なる哉、天地の間、此の心体、大にして動かざること山の如し。家の富むを念うこと勿く、秋の饑さを樂しむ勿し。一炬にして滅し、一弾にして消ゆ。消えざる者は翹だ此の心、綽々として餘裕あり。天地と一なるべく、天地と歩むべし。嗚呼、快なる哉快なる哉。孤軍奮闘む攸なし。拳を握り案を叩き起ちて歌う。全身全靈沸きて已まず。露西亞既に背く、孤軍奮闘、男児の力を致すは、唯だ此の秋を快と為す。

十一日 晴 朝 村山・青木・黒津三家の人を会し、布団各々三枚を頒ち与う。田窪氏を訪い、その側室氏の慈の亡を弔い、二十金を贈す。行きて平山生の病を視る。又行きて森口氏を訪い、十九枚を呈す。以てその常に鮮を遺れるを謝す。女氏不在、母堂応接すること頗る丁寧なり。又行きて張替氏を訪ね、拾九枚を呈し、その厚意を謝す。その婦采他五本を遺る。警報至り、急ぎ帰る。暑甚し。雷雨。

十二日 晴 昨夜警報頻りに至るも、睡魔襲いて起つこと克わず。此の朝、一粒の米なし。唐茹・水飴を以て飯に代う。一昨日、齊氏悉く米を盗みて去るなり。九一部隊農耕班長水沢伍長、兵をして薯三俵を遺らしむ。約に従

えるなり。又枝豆一束を贈らる。

十三日 曇 晝に空襲警報至る。停電し、情報を得ず。土橋某来る。烟草を呈し、以て過日の牛麦交換の任に当たるの謝と為す。二三日米、五鍼程寐ねて寤め、則ち睡に着くこと能わざるや二三鍼程にして後無何有の郷に入る。是れ憂いの為なり。黒・俵を招きて、一梱を托し、以て罹災に備う。梱中は衣類数点、午に垂んとして、轟然たる音響家を揺るがし耳を劈く。烟、大久保の西北方に起つ。防空壕中に米・采太を藏む。此の日、終日疲労、起つ克わず。試みに温至を挟むに八度一分、巾櫛人下熱剤を薦むるも、空襲にて壕に入るの要あるを以て、暫く之を待つ。夕、乃ち之を服す。一鍼、汗の発すること流るるが如し。水沢伍長配給品の鮭の罐詰及び茶を齎す。平山生長原にて菓餌を購いて帰る。余褥中に在れば面わざるなり。此の日空襲警報、朝より夕に至ること凡そ十二鍼。一昨日は米の配給日なるも日曜を以ての故に得ず。昨日は空襲を以ての故に得ず。殆ど將に餓死せんとするなり。

十四日 曇 晝に警戒警報至る。子清来る。宮川氏来らず。暗雨低迷、風雨將に至らんとす。書の五島子實よりして、山瀬別宅の事、名久田青年学校長、野上滋治氏に囑すと。且つ曰く、生家は山瀬と相去ること二里半許、綿貫氏も亦た相距たること二里半と。蓋し山瀬・綿貫氏相近きなり。

十五日 晴 雲 天日を蔽う。溽暑甚し。朝警報至る。伊豆一等兵、鯨十八尾を齎す。値を問うに曰く、五金。低廉なること驚くべし。若し它人之人に介さば、一尾値十圓ならん。平山生東京に使いし、まさに区役所を訪う。戸籍謄本、印鑑證明書を囑す。午、拉地奥に集い、詔書を拝聴す。噫々悲しい哉、痛ましき哉。吾等既に帝国の自由民に非ずして乃ち英米司配下の民なり。又何ぞ言わん又何ぞ言わん。噫々。鈴木貫何をか為さん、平沼騏何をか為さん。噫々。齊氏来り、方處を問うも答えず。歌六君訪ね泊る。

十六日 半ば晴半ば陰 朝、半島部隊幹部室を訪い、國見小尉・守屋中尉らと相い話す。皆茫然として為す伎を知らず。唯だ半島の兵独立国民たるを喜び、所在に団を為し相い歡ぶ。齊氏午食後辞去す。巾櫛人を船橋に遣り、阿堵

の物を領せしむ。局長山口氏来り、乳を乞う。女人に命じて之を与えしむ。B二十九又来る。一昨夜、阿南陸相自刃。今日の新聞紙に見ゆ。嗚呼、恥を知る者は独り阿南のみか。重光某は嘗て外務大臣となり、切りに露国の恃むべきを言えり。此に至りて勅選貴族院議員鈴木貫太郎及び其の閣僚、骸骨を乞う。朝、歌六君辞去す。由子送りて津田沼駅に至る。黒倉鶏卵二顆を購いて来る。巾櫛人船橋より帰り、某女人を携え来りて曰く、妾此の人に船橋にて逢えり。途みち聞くに大久保に来り、山野井氏を訪ね、物々交換するを得たり。その持つ伎を問わば、則ち曰く蜜・砂糖と。是れ先生の嗜む所、ゆえに携え来れりと。余引見するに果して之を持つ。且つその人と為り卑しからず。乃ち米麦馬鈴薯等を出して之に与う。前に人參豆等を呈すれば、其の人喜びて蜜及び糖を置きて行る。

十七日 曇 微雨衣を濕おす。青儻、自ら秦野に遊びて帰り、鶏卵五顆を恵す。村農の息、新婦を娶り、我に米餅及び卵を贈る。子瀧来りて曰く、眼を患いて外出すること能わずして今日に至ると。久瀾を謝して校事を語る。子清も亦た来る。泰子来る。午、肉を煮、子清・泰子・由子と共にす。震、弘子と共に来る。之を同じくす。子清、大沢大尉を訪い、辞去す。青儻に命じ軍牛を曳きて来らしむ。震辞去す。黒田子直・岡本子直・善次来る。岡本子直先きに去る。昨夜来、女人その夫とする所を以て来る。延きて之を見る。刺を示して曰く、宮本善一郎、川崎市果糖株式会社に奉職すと。相い歓語す。薯・茄・玉葡黍などを呈す。君曰く、家を此の邊りに求むるに有りや無きやと。余乃ち大久保家の夫婦に見わしむ。辞去す。夕、子直・子善と卓を囲み肉を煮る。辞去す。果糖・注射液を恵す。

十八日 曇 朝戸を叩く者あり。巾櫛人の將に那光教聖と命なづけんとせし者見ゆるを乞いて曰く、僕軍隊に在りて、示字に宿す⁽²⁰⁾。在鮮以来、先生に一見し、先生の門下に遊ばんと欲すること尚ひまし。允ゆるざるれば幸甚なり。昨十一鍼以来、戸前にたすいで先生に見えんと欲すと。余曰く、余は半島の子弟を愛す。爾吾が室に来らんと欲さば、敢て拒まんや。唯だ配給如何。恐らくは及ぶ能わざらん。且つ余が許もとに来らば、雑事多端、爾能く耐うるや否や、須く之を隊長に諮りて後、再び来るべしと。教聖辞去す。その言と人とを察するに、悪意なき者に似たり。且つ言語明晰、態度

整然、容貌端正にして鮮人中稀に見る倭なり。辞するに臨み、一苞を托す。余唯だ之を疑う。午、中谷君来る。午食を饗す。君に語るに財団の事を以てす。君は日本教育の立脚地と日本歴史の終始する倭とを説く。相い談し相い泣く。又爵を舎ぎ、牡丹餅ぼたんもちを作りて之を饗す。夕、辞去す。月半弦、中天に在り。日未だ全くは没せず。此の日、日鉄貨車来たりて、布団一百五十八枚、綿十枚、蚊帳二十張を搬びて行る。別に綿四枚、使者の請うに任せて之を与う。

十九日 晴 次男泰二(2)の命日なり。香華を奠して以てその冥福を祈る。黒僮、八十八農(2)の婦を訪いて曰く、明朝再び行きて以て持ち帰らんと。子清来り、一千三百金を齎す。一千金を与えて之を勞す。子清、大沢大尉の為に布団四枚を乞う。余喜んで諾し、且つ附するに座布団三四枚を以てす。黒僮を召し、黄昏に之を搬びて太尉を訪わむ。子清辞去して曰く、將に九一部隊を訪ねんとすと。溽暑甚し。温至八十九度。此の日始めて甘藷を食す。糖味未だ濃からず。

二十日 晴 玉葡黍方に熟す。昨日、一昨日、採り来り灼きて以て米の不足を補う。朝食後空腹甚しければ、乃ち自ら菹つけものを出し、青僮の婦の遺る倭の白米の飯を摂る。午前、二氣、森内氏よりす。青僮を使わす。(青)僮、鰻及び蟹三頭を齎し来りて曰く、鰻は七尾にて値五十金、蟹は則ち先生に呈すと。巾櫛人船橋に赴く。乃ち独り卓に即く。會なまたま岡本子直来る。卓を共にし蟹を食す。子直深く之を珍とす。巾櫛人も亦た帰り来り。同どもに食す。暑甚し。子直辞去す。黒僮来りて曰く、今日八十八を得たりと。煙草十本を与えて之を勞す。且つ命じて鶏卵を求めしむ。此の日、子直金一千四百円を出す。余曰く、外に巢工会あり、若先生五千余円を名とすと。若先生拒みて離さざれば、乞う先生自ら之を取れと。余曰く、可なりと。子直辞去す。殮は鰻の蒲焼卓に上り満腹す。平山生帰り来り、報じて曰く、債券相場未だ定まらず、売るべからざるなりと。夜月明。

二十一日 晴 朝 快車に乗じて東京に赴き、巢鴨に至りて教員会に臨み、訓示する倭あり。また生徒を集めて訓示す。齊氏快車を見、悪口雜言、明の為に之を悲しむの辞を弄す。余閑せざるなり。文部省を訪ね、管理課長に面し、

經專移転⁽²⁴⁾の事を依囑す。学士会館に到り、丁酉会に蒞む。栗木博士、三輪田、近藤、八田、香原、太田、吉田博士、大島、帆足、法貴、林博士諸人、畢く至る。午、文部省教化課長犬丸秀雄君来り、伯林^{ベルリン}の情状を談ず。君、大国民を介して余が名を識る。相談畢る。理事会は、会する者少くして、以て流会と為る。齊氏暴言多し。子清、由子と津田沼に来る。家に帰れば、宮本夫人在り。その乞いに応じて麦粉・小豆・薯・南瓜等を手う。高橋部隊牛肉を遺る。

二十二日 曇 雨將に至らんとす。朝及び午、肉を煮て食す。藤井子春、その児を携えて来る。昨日学士会館に来り、今日の来訪を約せるなり。玉葡萄及び麦茶・唐茄を饗す。子春は滋賀より来り、米五升を携うるも、它是衣袂の換うべきものなし。余大久保家に見^みうを薦め、巾櫛人をして東道し、且つ之を平山生に介さしむ。雨風漸く至る。夕に至りて益々甚し。停電す。早く寐ぬ。天譴^{あまつみ}荐^まり至る。是れ何の兆ぞや。

二十三日 朝 風なお息まず。石室の屋根吹き飛ばさる。布団・疊散乱し、而も雨なお至らんと欲す。酸と謂うべきなり。儻、青、農村及びその子、来り助け穴を埋む。女人等鞅掌して布団を曝す。蓋し屋根吹き飛び、その下に蔵する物は悉く濕潤して、復た用うるに堪えざるもの少なからず。遠思樓詩鈔一冊、綴りを割き每紙之を曝す。英語字典一頁ごとに紙片を挟む。過眼則録三十七冊も亦た糸を破りて之を曝す。庭内の老若来り助く。夕、酒を舎きて之を勞す。平(山)生をして文政府を訪れ、申請書を監理課長に示さしむ。田博士を訪い、且つ薬を三河薬局に購わしむ。午後乍ち雨乍ち歇む。急ぎ日に曝せるの物を収む。女人等奔走し頗る忙し。

二十四日 晴 新(聞)紙、進駐軍は二十五日を以て厚木に来ることを伝う。二十八日、横須賀に来ると。官令して曰く、輕挙する勿く、その業に安んじ、外人の要むる物は、必ず之を官に乞い、以て私に断ずること勿れ云云と。平(山)生東京に使い高商⁽²⁵⁾を訪ね、石井氏に面し、その津田沼に来らんことを促す。又文政府を訪い、又子清を訪う。午後、石井氏来る。命ずるに文政府を訪うの事を以てす。二氣、子清によりて曰く、牛車もて九一部隊に來れと。余車なきを以て之を辞す。子清曰く云云。平(山)生帰り来る。夕、齋氏来りて曰く、米兵上陸せば、千葉地方

復た訪ぬる克わず。是を以て来れりと。泰子明朝来り、その荷物を搬ばんと。又巾櫛人に命じ、早急に快車人を呼び、且つ曰わしむ。二十五六日頃、荷物を東京に搬ぶこと、先日快車人と約せり。必ず来れと。言辭来らずと言うに似れば、則ち巾櫛人を罪とす。殆ど常識の解する所に非ざるなり。富永君来る。

二十五日 雨 驟雨将に至らんとす。何ぞ天の不恵なるや。朝飛機三五隊を為して南方より来る。蓋し米国機なり。所謂の超低空飛行にて、以て情状を偵察するなり。齊氏奔走願る力め、東京に持ち帰らんと欲して、班長に乞い、牛乳甘藷を得、得意満面、夕站に至り、汽車の通ずるや否やを問い、帰り来れば急遽食を命じ、搬び去る。夜雨。黒槍の婦西瓜を遺る。高橋隊来る。

二十六日 天将に霽れんとす。日曜日。昨日、大沢大尉、団長氏を道びきて来りて曰く、土地建物は悉く返却す。翅だ牛のみ暫く之を待てと。辞去す。余、高橋隊本部を訪れて言いて曰く、今日以後建物の使用は、生の事とする處にして足下の責に属す。足下之を官に諮りて余を勞する勿れと。高橋隊長の来れるは、是が為の故なり。新(聞)紙豫報して云う、大風将に西土を襲わんとすと。日日晴れず雨ふらざるは是が為の故なり。午後、班長氏の東道を得て、農作物を視る。子清来り、二三事を報じ、辞去す。夜億う俵ありて寐ねられず。此の日、高橋隊長某軍曹を遣わし、九月上旬(まで)の滞在の事を依頼す。余応ぜず。

二十七日 晴 風 青儻上棟す。村農父子之を助く。人有り、余が境地に入りて牛舎を壊つ。(青)儻をして之を制せしむ。黒儻も亦た会し、謂いて曰く、二十五日、構築物挙遠藤先生に返せり。今壊つは非道なりと。其の人曰く、伍長氏余に与え、余之を受くと。(黒)儻曰く、是れ伍長氏の物に非ず。豈之を人に与うるを得んやと。その人已むを得ずして去る。巾櫛人船橋に赴き、途に返りて曰く、車を待つに來らず、嘔氣催おす。是を以て帰り来れりと。既にして曰く、漸やく復せりと。増淵子瀧、その一子の早大に在る者を携え(来る)。雞卵五顆を恵す。曰く、今日文政府を訪ぬ。文政府の人、移転すべきを意わば、乃ち後事を議せんと。苞を抱き食畢り、一巡して行る。曰く、明朝

巢鴨に往きて石井氏に事を伝え令を發せんと。午後、高橋隊副官某中尉、一少尉と來り、砂糖・澱粉及び酒を恵し、延期を乞う。余曰く、事急なり。唯足下之を急とせよと。夕、宮本夫人來り、水飴及び防睡菓を恵す。乃ち蒔・玉蜀黍・唐茄・和茄・雙豆等を呈し、以て謝と為す。此の夜亦た停電。平（山）生葛飾に赴き、車輪を繕修す。

二十八日 晴 風 宅間の子、由子の鍼經とぎいを持ちて來る。即ち余過ちて之を傷つけ、宅間君に托し、繕修する所以のものなり。値を問うに曰く、十八金と。更に一鍼經を托して言いて曰く、屢々なんじ乃の父を煩わせ、慙愧に勝ゆるなし。大いに之を海恕せよと。甘藷一苞を与う。又その住（居）の小岩に在るを聞き、苞と書とを托して、以て小高氏に寄す。辞去す。女人をして呼び返らしめて曰く、小高家に居らば則ちその答を聞き、若し割愛する故のものあらば領して來れと。その子唯々として行る。石井君修三來る。文政府の電報を示し、二三の事を議して行る。青僚、接綿セメント土少し許を田久保氏に得て來る。鉄棒を石に籍む。平（山）生東京に赴く。巾櫛人船橋に赴く。午後、小高氏の使者來り、接綿土二苞を齎す。又布団を乞う。即ち八枚及び蚊帳二張を呈す。澤君雞五羽を齎す。三羽は雛なり。乃ち去月持ち來れるものと生時を同じくするものなり。之を比ぶるに頗る小なり。君曰く、餌食足らざるなりと。一は則ち食雞、一は則ち病雞なり。値を問うに曰く、百七十圓。三拾圓を呈して以て君の為にす。辞去す。巾櫛人未だ帰らず。変あるを慮り、青僚の婦をして船橋に往き、之を尋ねしむ。既にして帰り來りて曰く、電車來らず、是を以て後れたりと。時既に酉を過ぐ。夕、子清來る。貳千金を与え、以て学校移転の勞を謝す。

二十九日、晴 昨日來拉地奧ラッポ天氣を報ず。人皆之を便とす。平山生津田沼役場を訪ね、印鑑證明書を乞う。午下、青年中尉來りて曰く、僕中学の卒業（生）なり、僕の兄野島も亦た中学の業を卒うと。余喜び延きて共に語る。會たま立田教諭來り鼎坐歡談す。一鍼にして辞去す。教諭蜜柑の罐二及び鮪罐を恵す。干瓢を副う。

三十日 晴 紙を出して日に曝す。先日雨に浸されしものなり。平（山）生東京へ之く。石井修三君來りて曰く、今日増淵氏と相携え、千葉縣衙を訪うに辰を期す。今既に辰を過ぐるも氏來らず。不肖独り往かん。之を諒せよと。

時に暑甚し。余その勞を慮り、女人に命じて藪を齎し、以て行厨に充つ。君曰く、若し亥を過ぐれば直ちに家に帰り、明朝訪れんと。午後君帰り来り、事の成る次第を報じ、教務課長の応答承諾の状を説く。余喜び二百金を出して之を賞し之を勞とす。君辞去す。殮。正秋来り、注射劑を齎す。巾櫛人の供設頗る至れり。托して糖一罐を姉氏に寄贈す。余の喜び知るべきなり。正秋亦た曰く、祖母大いに喜べりと。正行⁽²⁶⁾辞去す。此の日、朝鮮部隊⁽²⁷⁾の為に講演し、畢れば高橋中佐、副官某中尉来りて余の勞を謝す。此の日、米國總司令官⁽²⁸⁾榎伽沙厚木飛行場に来る。米兵の横須賀に上陸する者蓋し七千五百。

三十一日 晴 風 先の颯風の如きもの。冷なること秋の如し。秋の如きに非ざるに、候既に秋に入れり。平(山)生来り、出して余の俸及び家賃を示す。今日当に東京に到り、江古田の家を訪い家賃を取め、且つ拉地奥の繕修の成れるや否やを視るべしと。青僮⁽²⁸⁾屋を修め黒僮之を助く。雨。巾櫛人、樋口氏を訪い、海神に到る。柳井已酉朔君⁽²⁹⁾来り、その郷里の制する攸の新酷一升を贈らる。君は日本古学に通じ、その宗教を究む。一鍼にて辞去す。中谷政一君訪う。是れより先き、余、子清に囑して、□⁽³⁰⁾の財団に在るを謝す。子清之を難しとして君を推す。君是を以て来れるなり。巾櫛人未だ帰り来らず。青僮の婦に命じて食を供せしむ。既にして巾櫛人帰り来る。樋口夫妻及び児良彦俱にす。中谷氏辞去す。囑するに子清氏に囑する攸を以てす。鳴示苦烈氏及び保鈍⁽³⁰⁾一瓶を恵す。樋口夫婦梨子を恵す。玉蜀黍、甘藷及び菹を供す。愛子、茄子、瓜、玉蜀黍等を擔いて行る。雨。

九月朔 雨 停電なれば拉地奥の報を得ること克わず。此の日、当に教員会を開くべきなり。翹⁽³¹⁾だ雨の故に会する者少なからん。午後、石井修三、増淵、坂口、綿貫、柳井、黒田、城田諸氏来る。余、訓示して後、爵を舍く。夕散ず。経專移り来る。是を以て諸子を会するなり。篤子の書河口より来る。

二日 曇 涼し。平(山)生拉地奥を齎す。此の時局に当り、繕修し了るは驚くべきなり。命じて薬を長原三河薬局に購い、又田博士を訪い明の死亡診断書二通を乞わしむ。午、田博士の次男義堂君来り、平(山)生を見るや不⁽³²⁾や

を問う。曰く、不^なと。又互いに了し、苞を披いて鮑を喫す。巾櫛人玉蜀黍及び茄子を携え採る。此の日、停戦條約調印豫定日。B廿九伍を成して飛翔す。恰も群鶴の天に舞うが如し。雨將に至らんとす。青僚屋を造り、黒僮之を助く。西宮生来り、砂糖を恵す。幸八の老母来り、西瓜を恵す。四五日来、多く諸・茄子・玉蜀黍を撰りて米を食わず。唯だ虞る、身を害するや否や。皆曰く、沖繩の人米食せず、常に甘藷を撰るのみ。何の害かこれ有らんと。夜、降伏調印を拉地奥に聴く。

三日 晴乍ら曇 午、増淵君来り、縣衙を訪ぬることの状を報ず。曰く、乞う、明日午下、人をして今日提出する攸の書を領せしめよと。余曰く、直竹³¹に命ずるを可と為さんと。会たま子清来る。伝言を子直に囑す。泰子、近藤等と相い携えて来る。齊氏も亦た来る。子清將に去らんとして一千六百元を乞う。牛の値なり。且つ曰く、大沢大尉以て無償こそ然るべしと為すと。水沢伍長来る。平野中佐に薦めて此の金を求めしむ。事急にして、今日得て之を領せんとせば、乃ち銀行切手に署して之を付さんと。三人なる者出でて薯を盗み掘る。二氣、大沢大尉と相語り、高橋隊の速やかに撤去せんことを促す。夕、泰子等辞去す。齊氏泊る。その多弁耳を聽するに苦しむ。

四日 雨 昨夜、魘夢に醒まさるること数しば。夢に忠二³²帰り来る。衰顔瘠軀、衆喜びて抱擁す。余も亦た握手してその無事を祝う。醒めてその死せるを忘るるなり。平（山）生来る。命じて第一生命社に至り、終れば長原を過ぎて菓餌を購わしむ。黒僮に命じて樹を六小廠舎の傍に植え、以てその觀を美にせしむ。又青僚に命じて石室を整頓せしむ。雨に濡らさるるを以て、客を迎うべからざればなり。齊氏切りに快車を乞うも至らず。午下、鈍日見る。午後、津田沼青年学校長某来り、耕地を借らんことを乞う。某は刺を示さざれば氏名を知らず。直竹縣廳教學課を訪い、帰途来り過りて曰く、移転許可申請書、縣は文部省に移さしむ。足下の來訪を煩わさずと。直竹に囑するに菓書き三種を以てす。同に殮す。辞去す。高橋部隊副官中尉氏来りて曰く、乞う、一週日を延ばさば必ず移らん。余曰く、朝鮮兵の為に講演せん。氏曰く、固より希む攸なり。余曰く、朝鮮兵は無為に日を送る。身心に宜しからず。その勞

力を借るを得るや如何。氏曰く、固より可なり。乞う、明日提供せん。余三十名を乞い、氏之を可とす。又曰く、内藤主計少尉、一兩日中に来りて先生を訪れん。請う之と相い諮れと。余曰く、諾。夕、平(山)生帰り来り、報じて曰く、明日復た往き、以て事を濟さんと。

五日 曇 微雨 朝、黒倉来る。役を半島兵に命じ、以て花卉を移植せしむ。倉曰く、彼の徒帰るを急ぎ、怠業漫々、役し難し。余曰く、若し用に就かざれば之を解散するのみ。寅、兵集合す。乃ち訓示し且つ勞に服せんことを囑す。石井修三来る。乃ち之に告ぐるに昨日の事を以てす。辞去す。黒倉来り報じ、作業の一段落を告ぐ。乃ち甘薯を兵等に与え之を勞す。田博士の子義堂君来る。甘薯及び玉蜀黍を与えて之を去らしむ。高橋隊下士官某に囑して、兵をして疊を庫裡に搬ばしむ。高商一年生沼木某来り、入寮を乞う。平(山)生帰り来り、事の成らざるを報ず。夜、齊氏辞去す。昨日、議會開會。陛下親しく臨み勅語を賜りて曰く云々。

六日 曇 紅暎雲隙に見ゆるも乍ち隠る。小山只雄、伍長を以て解除され来り訪ね見ゆ。諸種の好物、砂糖、味噌、牛罐、蜜柑罐、干瓢、干菓、澱粉、皆余の嗜む所、厚くその盛意を謝す。子瀧来り、時間割表を示す。余略ぼ之を可とす。卓を共にして午食す。子清来る。先に去りて曰く、九一部隊を訪ね、而る後再訪すべし。平(山)生自ら石家廣瀬米次郎を訪ね、帰りにて曰く、石家は十二三日を以て来ると。内藤主計少尉来り、借上料及び撤去の事を議す。夜、村農、森内氏を訪ね、鰻七尾を領して帰る。価半百。貴しと雖も手にし難きの物、謝せざるべからず。森内氏の誠意なり。只雄来り拉地輿^{ラッヂ}を調整す。二機ともに善く受信す。

七日 曇 秋冷を覚ゆ。中櫛人曰く、鰻飯の饗すべきあり。只雄氏如何と。余曰く、可。乃ち招請し共に饗す。黒倉来り謂いて曰く、藪を掘るの三人、東京より来るも、軍票あるや否やを知らずと。余曰く、之を檢せよと。

八日 曇 温至七十二度、雨將に至らんとす。中櫛人船橋に到る。泰子、松本友子、相田、近藤二子を伴いて来り、藪を採りて帰る。樋口来る。余四人の者を召し謂いて曰く、友子の母淑子、眞摯慧敏、婦人の範たり。泰子は則ち焦

燥度を失し、殆ど印哲利型に非ず。唯だ之を論さば則ち改むる攸あり、以て次となすべしと。余、亨³³の為に記念事業を設けんと欲す。亨は神と為る。所以に法名を諡せず。然れども既に寺に葬れば、則ち戒名を作り、家庭にて之を祭るは、当然の事たり。夫れ靈柩を見て以て亨の在りと為して之を葬る。即ち生人を葬るは常識に非るなり。爾等以て如何と為すや云々。竹太郎³⁴諸を擔いて行る。森内氏余の為に蟹の大なるもの四甲及び鯛の小十数尾を購う。値四十金。魅架沙東京に来る。兵の進駐八千。

九日 風 晴 日曜日 巾櫛人花匠学校を訪う。平（山）生来り、蒔及び葱を掘る。樋口竹その妻子を携えて来る。子竹、機械を賣し、大砲を解す。吾が心即ち卻む。理髮匠山本女来る。長曾氏の子四人来り布団を乞う。六枚を与う。宮本夫人来り、蜜二瓶を患す。愛子蛤を患す。乃ち船橋海岸にて獲る攸。平（山）生、石井氏に使す。終に帰らず。十日 曇 大沢大尉訪ね（来り）歎語す。会たま子清も亦た来り、相い見て哄然たり。終に置酒し共に食す。大尉辞去す。綿貫書記来る。命じて工を助けしむ。書記將に帰らんとし、囑するに宮本夫人の囑する攸のその子三中入学の事を以て、増淵教授に伝言す。此の日塗師来り、六小廠舎を塗る。余その早朝に業に就くを賞す。

十一日 曇 冷 温圣七十二度。石井君来る。余その来りて津田沼に住むを促す。公文書七八通を出示し、裁を乞い辞去す。佐藤少佐夫人、児を負い来りて耕地を乞い、葡萄酒二瓶を患す。室に入らずして行る。愛子、清子と来り、鮮魚及び洋醬油を患す。子繁来る。共に午食す。辞去す。夕、竹太郎来り。酢を患す。共に殮す。又爵を舍く。小山只雄来り、明日將に前橋に帰らんとす。會たま青子も亦た来り、葡萄酒を饗す。青子、神明坊の邸を訪ね、林檎及び栗を賣す。夕、米・醬・味噌を獲。余その方を知らざるなり。夜、睡気切りに催おす。乃ち青子及び只雄に謝して急ぎ寝に就く。

十二日 細雨 温圣七十二度。一昨日物を咬むに忽然として下齒一枚を毀つ。痛み甚しくしてなお已まず。又女人に命じ玉蜀黍粉の餅を作らしめ砂糖を加う。是を以て味は嘗む可からざるに非ざるも、翹だ消化し難し。余の下痢す

るは是れが為の故なり。又晴る。英文学科表を作る。終日来訪者なし。殮に金頓あり、粟を身と為し、藪を衣と為し、加うるに砂糖を以てす。美なること言うべからず。

十三日 曇 涼 朝、陸軍少佐藤仍君訪ね（来る）。余未だ君を識らず。一昨日夫人来訪し、葡萄酒を恵し、耕地を借らんことを乞う。余未だ決すること能わざるなり。今日来訪し申ねてその意を言う。余曰く、請う暫く之を待てと。君熔磁爐等の事を語る。頗る余が心を惹く。再訪を約して行る。坂口教授来る。余が書を見しや否やを問う。曰く、未だしと。柳井教授も亦た来る。既にして石井、黒田二子来る。石井子曰く、今日教授は皆来らんと。余却つて忘れたり。増淵子も亦た至る。余英文学科表を示し、相い論議す。午、卓に就き厨を啓く。善次来る。子清後に到り、学校開始の事を議す。戌を過ぎ散去す。夕、国見少尉来る。平（山）生車匠を訪い、繕修の成車を得て来る。新紙東条某の自殺未遂を報ず。聞く者皆笑う。

十四日 晴 涼 温聖七十二度、朝、佐藤少佐来り、拂下品の事、亦たその方式を語りて行る。夕、阪口教授馳せ来り、英文学科表を訂正す。竹太郎も亦た来り、藪及び汁を供して以て殮に代う。此の日、小高君来る。余その供する俵の布団を汚穢せしことを謝す。君曰く、以てする勿れ、以てする勿れと。且つ曰く、先生甘を欲するかと。余曰く、最も嗜む俵なりと。曰く、飴之を手にする或らば、請う之を献せんと。余曰く、味噌ありや否や。余が冢之を欠くこと数十日、困苦甚しと。君曰く、之を得ること難からず。乞う暫く之を待てと。君、工爾コイルタシム太教罐を約して行る。戦争犯罪者連行さる。

十五日 晴 拉地奥、橋田元文相等の自決を報ず。何の故かを知らず。増淵子瀧来る。余、愛子・巾櫛人及び平（山）生を伴いて、境域を視、廠舎に入る。子清も亦た来り、共に食す。子清先に去る。宮本夫人来る。甘藷を呈す。青襟をして之を掘らしむ。夕、魚山生端書を持ちて来る。石井君、經理課を訪う。

十六日 日曜日 雨ふらんと欲して雨ふらず。平（山）生に命じて、英文領取書、学科表等を騰寫版にす。竹太郎

来りて曰く、今日僮二人、工爾太を搬び来る。藪若干を与えんことを乞う。余曰く、宜しと。午後果して至る。夕、辞去す。此の日、牝鶏始めて卵うむ。青儵に命じて道標を作り明日に備えしむ。又黒倉に命じて標札を吊けしむ。

十七日 雨ふらんと欲するも夕には則ち晴る。石井君生徒四人を率いて来る。新事務室に入る。直竹来る。綿貫も亦た来る。卒業生四五名来り、教養の勞を謝す。平（山）生を行り、東京に使用して返る。又石工廣瀬米次郎を訪ね、その不信を責む。米次郎曰く、明日午前必ず訪うと。宮本夫人来り、罐詰、海苔、佃煮及び糟糠を患す。藪を呈す。

十八日 暴風戸を叩き瓦を飛ばす。雨伴わず。平（山）生東京に使用するも風を以ての故に已む。騰寫版地図を作る。石井君来る。風強きを以て、石室に移し入り事務を視る。午下、六名来り卒業を謝し、且つ別れを告ぐ。停電、拉地奥を受げず。

十九日、晴 气象台の天気豫報に云う、今明日秋露れと。拉地奥報じて云う、槐加沙朝日新聞社に命じて、発行を四十八時間停止せしむ。その何の故なるかを知らず。小山只雄前橋より来り、平松姉の遺る彼の二十世紀梨を齎す。乃ち事務を命ず。此の日、石壕を覆う屋瓦の板を取り、代うるに薄板を以てす。將に以て卓子を造らんとすればなり。青儵之に主たり、只雄之を助く。石井君来り、増淵君も亦た来る。午食後、牛車を御して、習志野学校に到り、材料廠長佐藤少佐に面し、熔磁爐を視る。余その拂下げを乞う。君曰く、既に上司の旨を得たれば、乞う早く来れと。又三尖台⁽³⁵⁾二基を患す。増淵君種油一瓶を贈る。岡本子直来る。余將に家を辞さんとす。乃ち謂いて曰く、余の帰るは後^後からず、藪を食いて以て待てと。家に帰らば既に行^行く。子瀧に命じて、文政府に示すに英文学科表及び境域案内図を以てせしむ。子瀧曰く、今より張替を訪ね、若大将に面し、而る後文政府に到らんと。余その少時を危ぶむ。此の日外出すれば灼けるが如く、内に入らば涼気爽然たり。真に所謂秋晴れの候なり。夏時、日の出早く、戌を過ぐれば則ち既に東方の白きを見る。今は則ち後ること一鍼。夕べは則ち寅に先ちて日没す。今は則ち子に先ちて既に没す。一日の長短の差三鍼なり。

二十日 朝 雨かと疑えば乍ち霽る。巾櫛人、船橋に使用す。張替の若大将来り、境内を視るを乞う。之を可とす。卒業生稍しく来り、証書を乞う。石井君来る。善次来る。坂口教授もまた来る。須田馬太郎、樋口竹太郎を伴いて来る。会たま鈴木君佐市將に辞去せんとす。此の君に先んじて来れるなり。余命じて熔砥爐を視せしむ。倉・黒をして道びきて佐藤少佐に見わしめ、以て爐を視せしむ。君既に帰り来る。乃ち竹太郎工学士に語り、与に運搬法を謀るべしと。會たま竹太郎至る。好機再びすべからず。兩人をして相い晤らしむ。君去る。午食。子馬等牛車に搭じて行る。花匠森内女史来る。白隠元豆を恵す。巾櫛人をして蔬菜を呈せしむ。鈴木君粉乳を恵す。夕、立田君来る。余君の奉職すること既に久しきに、俸給亦た低きを念い、これをして経專に講じて以て之を益さしめんとす。之を以て之に晤るに、君固辞すれば乃ち止む。君、飴を作るの約あり。大麦及び諸を出して之に示す。君曰く、今日携行し、家に在りて之を作らん。十日の後得来り献ずれば則ち可なるかと。君、納特利面³⁶一罐を恵す。村上加都女、蟹数甲を恵す。

二十一日 微雨 平(山) 生を長原に使いし、葉を購ぜしむ。昨日、黒田直竹、書を以て休暇を乞う。肺患を以て静養を要するなり。朝、岡本子直、郷貫より来り訪う。昨日、珈琲一袋を恵す。平(山) 生持ち来り余に示す。罐に容れて之を存す。泰子・近藤等来る。子清来る。泰子と相い晤り辞去す。戌を過ぎること半鍼、平生返り来る。夕、樋口竹太郎来る。熔砥爐解体の事を依頼し、相い語ること一鍼。辞去す。此の夜、高橋隊炊事部員、米一升、玉蜀黍粉一俵、高粱数斗及び醬油一升を齎す。謝を言う。

二十二日 曇 朝、高橋隊副官木島中尉及び軍曹某相携えて来り、永き留まりを謝し、且つ今日撤退する旨を告ぐ。談話久しくして辞去す。二氣・増淵子瀧曰く、唯今、張替氏宅に在りと。余その速やかに来り見んことを促す。食後、子瀧来る。石井氏をして木村某を市川駅頭に訪ねしめ、配給の事を問わしむ。塗匠、検閲を乞う。乃ち巾櫛人・愛子・清子を携えて出でて見、一巡して返る。此の日、愛子鯉魚数十尾を恵す。森内氏も亦た余の為に鯉を媒す。岡本子直、

生徒二名をして、原紙及び藁紙を遣らしむ。二生將に帰らんとし、鈴木に書を托寄す。午後、巾櫛人を拉して廠舎を巡視し、家に帰る。

二十三日 微雨稍やく甚し。古積栄来り、久濶を謝す。竹太郎も亦た来る。之をして佐藤少佐を訪ねしむ。頃刻にして帰り来りて曰く、少佐は不在、夫人に面して懇ろに明朝を嘱すと。二氣と相通じ、卓を同じくす。爵を舎きて相語る。此の日彼岸の中日、邦俗具を供え冥福を祈る。鮎・牡丹餅・赤貝あり。畢りて拉地奥ラヂオウを聴くに、米国の日本を統治する要綱云々を伝う。二子辞去す。塗匠功を竣え金を与う。

二十四日 晴 朝、高橋隊副長官、兵五名を遣わし、示字を洒掃せしむ。五名なる者怠惰にして事を事とせず。乃ち藪を取りてこれを卓上に置き謂いて曰く、畢らば則ち之を食えと。五名なる者勇を鼓して動く。余家に帰る。柳井己酉朔教授、増淵教授皆な在り。増淵氏油揚げ、豕油、塩、卵等種々の物を恵す。同に午食す。子清、張替若大将を道びきて来り、賄いの事を議す。既にして若大将辞去す。子瀧来り、子清も亦た去る。坂口教授来り、時間表を視る。子清に托して直竹に伝言し、打電して藤井教授を招致す。又余が意を古積子栄に伝え、以てその移り来ることを促す。亥、宅間生、無花果一函を持ち来る。藪を与えて以て之に謝す。又持ち来らんことを促す。今日二十世紀梨は方に竭き、無花果之に代る。また可ならずや。此の日、示字・食堂を巡視す。疲れたり。

二十五日 晴 昨夜胸痛みて寐ねられず。辰を過ぎること半鍼、下痢。未を過ぎて復た下痢。朝、晝寢。石井・柳井・増淵諸子来る。立田教諭令娘を拉して来る。鮎罐及び下駄の緒を恵す。竹太郎来る。佐藤少佐を訪ね、還り来りて爐の解体運搬法を議す。齊氏来り、能弁にして大いに震の徳を頌して亨に及ぶ。竹太郎先きに辞去す。齊氏泊る。子瀧、子己亦た本部に泊る。

二十六日 晴 柳井子己来る。昨夜寮生の泊れる者五十一名と。子瀧来りて今日の行事を議す。鈴木佐市君来る。告ぐるに竹太郎の辰を過ぎて来れるを以て、君の事を待つを冀ねがうと。君辞去して曰く、辰を過ぎて復た来らんと。余

境内を一巡し、子龍を招き、生徒を集めて洒掃運搬の事に当たらしめ、且つ教授室及び事務室を作らしむ。子栄、原紙印刷紙を齎す。生徒を示字(37)に集め訓示す。鈴木君来る。子栄をして竹太郎の習志野学校に在るに迅ぎ行きて會すべきの事を告げしむ。午食後、鈴木君帰り来る。二生に命じて黒板を塗らしむ。夕、子栄、子竹、工四人を伴いて来る。四名を勞して藪を与う。子栄、子竹と卓を同じくして歿す。齊氏行る。黒、卵を恵す。

二十七日 曇 雨將に至らんとし風搖る。朝、土橋某を召して戒しむる故あり。此の日、当に修身第一章を講ずべきなり。寅を過ぎること半鍼。示字に入り生徒の來集を待ち、一礼し、然る後講話す。畢りて家に帰る。正秋來りて曰く、二三日中に將に広島に赴かんとす。是を以て注射器・強心比多寒古等(38)を齎し、且つ葡萄糖を注射し、急ぎ辭去す。竹太郎來りて曰く、汽車混雜し、是を以て後ると。直ちに習志野学校に到る。午、帰り來り同に食す。澤勇君來り、干魚用あるや不やを問う。曰く、之を乞うと。君曰く、一貫勿百五十圓と。十貫勿、明日以後三日にして之を齎さんと。又曰く、先生鱸を好めるかと。余曰く二三年來求めて得ずと。君曰く、乞う之を索めん。暫く之を待て、之を待てと。柳井教授を召し生徒十人を集め、甘薯を掘る。僮(39)をして牛車を借らしめ、習志野学校に到る。又黒僮・青僮をして牛車を御して、板敷枚を搬びて同校に到らしむ。愛子二子を拉して来る。清子菓子をして以て遣る。その味言うべからず。清子を召して之を賞す。清子辱恥して他を言う。石工羽成來る。余責めてその業を続成せしむ。二三日後に再び来るを約して去る。夕、竹太郎、工四人に命じて熔砥爐を搬び、返りて曰く、借る所の牛車、軸屈す。乃ち家の車に代うと。余見んと欲するも、身体の瘠なるを慮り已む。四人なる者に食を攝らしむ。亥、拉地奥の報ずるを聴くに、至上榻(40)元帥(39)を訪ぬと。之が為に諳然たり。宅間氏の子來り、苹果(41)十顆を恵す。余大いに喜び、藪を呈してその盛意に謝す。朝、土橋某を遣る。余の嗜む故なり。雨至る。氣象台の豫報適中す。夜、工四人、火熱爐を卸す。功を卒え乃ち甘藷を与えて之を返す。竹と同に食す。竹太郎、四人の者の闇に迷うを慮れ、懐中電燈を手にして以て之を送る。頃刻にして返り來りて曰く、珍客あり珍客ありと。見れば則ち秋山傳之(40)なり。相喜び同に食

し相い晤る。子竹先きに去り、子傳沐浴し、泊る。

二十八日 風雨 余疲れ、柳井教授をして代講せしむ。子竹来る。傳之と卓を同じくして午食す。巾櫛人、鮪二種を制す。一は則ち智良志、一は則ち握。鮪これに加う。鮪は子竹の齎す攸なり。新たに獲たれば跳ばんと欲す。味極めて佳し。午後、柳井教授、佐藤少佐を訪い、図書拂下の事を問う。帰り報じて曰く、主任は福永実主計少佐、図書は則ち大いに見るべきものなし。来月を期して吾往きて領せんと。傳之、帰りにて辞去す。子竹送りて大久保驛に至る。平生眼を患い早退す。増淵・柳井両氏を招きて、茗及び鮪を享す。夕、子栄来りて曰く、一昨日帰京し足を痛む。昨日来ること克わずと。叩頭陳謝す。

二十九日 先妣の命日。比者、寝に就きて蚤の為に困しめらる。因りて以て先妣の常に之を捕うを憶うなり。温室六十六度。昨日以来頓に冷し。拉地奥報じて云う。東京新紙某事を掲げ、官は発賣を禁ず。联合軍司令部以て自由を阻むと為し、吾が官憲を責め、厚く将来を戒むと。竹太郎来りて火熱爐搬了の事を告ぐ。工人を集め食を供し之を勞す。朝、二年生の為に講学す。

三十日 秋氣爽然たるも忽ち雨ふらんと欲す。日曜日、寮生外出す。一年生に命じて疊を撤し又芋を採る。柳井教授之を率う。書の蝦名大尉⁽⁴⁾及び藤井学士よりするあり。返書を作りて各々に寄す。巾櫛人往きて花を森内氏に学ぶ。甘藷及び茗を携う。寮監室に至り柳井教授を招き、生徒の在寮者五名を集めて歎晤す。午、田崎博士、長子を携えて来り、干鯨を恵す。終に余が病を診て曰く、血圧稍や昂く浮腫あり。須く塩分を節すべしと。戌に垂んとして辞去す。牛車に搭し、家を大久保坊に視る。天気晴朗、紅日沈まんと欲し、雲その央を帯びて画の如し。新紙鞆元帥と至上と相い並んで立つの図を掲ぐ。又至上と米国記者との会見の状を載す。

十月朔 月曜日 戸を押せば濃霧にして溪を隔つるの處を弁ぜず。泰子、近藤・會田二生を拉して来る。甘藷・干麵麩を与う。澤君干魚及び鰻・鱈を持ちて来る。鰻と鱈とは、余の君に囑して以て購うものにして、値は三十金、干

魚は則ち二千金。君の余の屬を以て販うものなり。君曰く、干魚十貫、今日一貫を持す。餘八九貫勿は船橋に在りて之を驛及び近人に托せり。乞う人を選びて僕とともに船橋に赴き以て持ち帰らんと。青儻・村農に命じて、とともに往かしむ。森内氏来る。乃ち鰻及び鱸を割かんことを囑す。石井君修三、東京に使いしてより帰る。一瓶の酒を与えて之を勞す。會田生、母氏の命を以て賣して布及び脱脂綿を恵す。此の日期、二年の為に社会学を會講す。又研究科生の為に学問の要を講ず。平生東京に使いし、家賃を集む。途、船橋署を訪ね、日本刀三身を提出す。

二日 曇 朝 揭示して生徒を松林平に集め、以て哲学を講習す。光子命日、余の生誕日なり⁽⁴²⁾。夕、赤飯を炊き之を祝う。愛子よく此の日を知る。故に鮮魚二尾を賣して以て賀す。清子も亦た来る。干麴十袋を与えて之に謝す。柳井君生徒の為に国語を講ず。平生東京に使いし、正秋を帝大医院に訪い、菓餌及び前橋に遺る物の物を領して来る。此の日子瀧当直。招請して卓を共にし、酒を進む。會たま竹太郎来り、鼎坐談笑す。既にして皆な散ず。前橋に遺る物の葡萄及び無花果、惜しむべし無花果はみな腐れり。

三日 晴 朝、子瀧一二年生を集めて講習す。平山生東京に使いす。立田夫人来り、麴麴及び萃子七顆を恵す。大妻を乞いて曰く、曩日の物は芽を発せず、飴を成し難しと。余曰く、新たに之を農家に乞いて後献せんと。青儻の婦をして俱に往きて芋を採らしめて之を贈る。午後、宮坂・近來、林檎及び梨子を恵す。黒僮をして芋藪を佐藤少佐に遺らしめ、且つ謂わしめて曰く、今夜樋口往き訪ねて勞を謝すと。夕、將に寝ねんとし、竹太郎来り、夜、少佐を訪うの状(を告ぐ)。平生帰らず。温し。

四日 昨夜大雨至り、朝雷鳴家を撼す。既にして日出で將に霽れんとするが如し。褥中十八史略を繕き、堯老いて勤に倦むの句を見る。字の有無を閲するなり。温至八十二度、汗の発するを覚ゆるなり。朝、大雨。生徒を食堂に集め講習す。柳井教授講習す。余教員室に入り横臥す。石井・綿貫二子来る。午後津田沼青年校長来る。柳井教授を召し、生徒に命じて寮に入る可からざらしめ、通学生は須らく控室に入るべしとす。乃ち命じて生徒をして机二脚を撤

びて廠舎に置かしむ。出牛君来りて曰く、明日以後、服務せんと。午後、晴れんと欲して終に霽れず。平生、高橋隊に使いし内藤少尉に面す。少尉曰く、七日に來り謝せんと。平生に命じ土に刻して段を造り、以て歩行に便にす。此の朝、余將に顛倒せんとす。地の滑るを以てなり。夕、吉村生を召し、寮生の名を記す。又石井氏に命じ、明日、經理部を訪ねしむ。夕、愛子、良彦を伴いて來る。鰻及び梨を遺る。皆な佳し。

五日 大雨 温圣六十六度。俄かに秋冷を覚ゆ。辰、气温愈いよ降る。風亦た強きを加う。颱風の兆あり。農の幸八、饅頭粉を買す。牛肉を遺る。雨愈いよ甚し。近來、餅子二十片を遺る。その家の搗く攸にして、余の嗜むを知りて持ち來れるなり。子瀧栗を恵す。夕、子瀧・石井・綿貫三子を招き、殮を共にし、爵を舍く。皆曰く、先生飲を解せずして、人を会するを解す、亦た奇ならずやと。雨甚し。

六日 晴 石井子に命じ經理部を訪い、拂下の事を問わしむ。村農に命じ、三星産業の倉庫を訪ね、工爾多を乞う。庫人曰く、伝票なければ不可と。則ち往きて小高氏を神田坊に訪ぬるも不在。乃ち歸る。朝、事務所に入り諸所を膳修す。加藤正世君來る。僅の保阪兵役より復り來り余を訪う。之に謂いて曰く、爾余に仕えるに意なきや。歸りて之を父兄に謀らずやと。膳を供し辞去す。森内氏鰻を介す。値八十圓。巾櫛人曰く、一昨日六十圓、負担に耐えざるなりと。余も亦た之を然りとす。且つ一日澤氏鰻及び鱸を賣し、四日愛子恵す。僅々一週日に之を得ること四回、奈ぞ過多なるや。余以て然りと為す。夕、平生來りて病を訴う。余曰く、迅ぎ歸りて褥に臥せと。

七日 快晴 朝、出牛と運動場を視る。又寮生をして芋を掘らしむ。家に歸る。午後再び出て圃を視、來りて膳を盗む者を戒しめて之を返す。一人を招き之を戒しむ。その徒掘りて已めず。長曾君夫妻來る。之をして芋を掘らしむ。芋を掘るの生徒八名來る。茗を酌み膳を喫す。長なる者言う、村牛切りに哲学等の事を請い問うと。乃ち担山⁴³・默仙⁴⁴及び神等の事を話す。散去す。樋口竹太郎來りて曰く、書の博之君よりあり、疊の用に耐うるや否やを請い問うと。余曰く、爾往きて之を視よ。余の視る所を以てするに表座^{せざ}は皆破れ、紙を貼るに非れば用うべからざるなり

と。子竹と卓を同じくす。食畢るも未び若を暇らざるに戸に呼ぶ声あり。巾櫛人之き接すれば則ち高橋隊の主計軍曹某々二人、建物質を拂わんことを請いて曰く云云。余曰く、理に非ず。九一部隊は月に三千五百圓を拂う。今その半ば以上を用いて賃すれば則ち六分の一に当らず。不合理の甚しきものなり。受諾すれば則ち九一部隊の人以て理に非ずと為さんと。拒否せんと欲す。二人弁疏し、固く乃ち之を領せんことを請う。田崎博士の息来り藪を乞う。歟を貸し之を掘らしむ。拉地輿、幣原内閣の成ることの状を伝う。

八日 雨の聲夢を驚かす。塾則を起草す。朝、一二年生の為に英文の生々碑誌⁴⁵を講ず。行きて事務局を視る。石井氏に面し、その東京司管区経理部を訪ねし状を聴く。午、卓上に栗あり。秋味味わうべし。午後疲れ床に横たう。又出でて塾を視る。新紙伝え云う、米軍、神道の国教たるを禁ずと。夜、二百燭光を塾に貸す。

九日 光 東方より起るも雲乍ち之を蔽う。天も亦た強風戸を叩く。朝、一二年生の為に生々碑の義を講習し略畢る。宮本夫人来り、糖水少し許を恵す。立田教諭夫婦来り、海苔・椎茸・麩を恵す。又飴一瓶は余の囑して以て制せる物のものなり。生藪二百匆、大麦一合にして得る攸三十瓦云云。今朝、書を蝦名学士に寄す。北海道に在り。囃らざりき、学士飄然として来り訪ぬ。相い飲ぶこと甚し。泊らんことを薦む。乙次郎来り、齊氏の遺る攸のものを齎す。森内夫人来る。大雨既にして已む。乙次郎去り、夫人去り、立田氏夫妻も亦た去る。蝦名学士泊る。学士榻に横たわり蚊張を張らず。余独り之を張る。その糞集襲撃を恐るればなり。学士曰く、為に心を勞する勿れ、僕海軍に在ること三年、榻と帳なきとに慣れたり。心を勞する勿れと。会たま停電、早く寝ぬ。

十日 晝に何鍼かを問う。蝦生懐電を燭らして鍼経を視て曰く、方に亥と。乃ち知る昨夜無何有の郷に入るは経十鍼余なるを。生曰く、先生寝に就くや、鼾聲雷の如しと。朝、一二年の為に蝦名学士をして講習せしむ。子瀧来り、校事を談ず。午後子瀧去り、子賢亦た去る。曰く、十五日再び来り、講演せんと。綿貫書記を召^よび、その転宅を促す。此の日終日雨。

十一日 又漕々の音を聞き眉を窘む。諸所の屋漏れ朽ちんと欲す。書を作り山本初男・穂積重遠・沖中恒幸・宮澤俊義・吳主恵諸氏に寄す。朝、一二年生の為に英文示碑を講習す。柳井教授干鯨十尾を恵す。味極めて佳。教授来り、見えて厚くその意を謝す。石井氏を招き拂下書を托す。内務省及び文部省に提出す。氏曰く、明日東京に赴き、四五の官署を訪い、因りてこの便に由らんと。之を可とす。青俵木材を搬び、足滑り肩を傷つく。巾櫛人をして鮪を造らしむ。青俵の婦持ちて以て平生の病を問う。曩日、習志野学校の人、庫裏の蔵書を寄贈せんことを乞う。柳井教授行きて之を受く。多くは兵法書、余命じて之を焼かしむ。今日教授を招き、申ねて之を命ず。此の日終日雨。夕、石井・柳井二子を招きて餐を共にす。翅だ恨む、珍味の嘗すべきなきを。芋味噌汁、椎茸、麩の煮物。食後櫻餅あり。巾櫛人制す。二子賞美して措かず。置酒して歡晤す。

十二日 快晴 小竹溪波を漂わす。雨水横溢し、蔬菜腐朽す。惜しむべし。生徒に作文を試み、而る後作業に就く。柳井教授之を率いる。既にして出牛君来る。その遅きを責む。午後事務局を視る。又塾を視る。樋口竹太郎来る。明日生徒の為に電気を講ぜんことを囑す。共に殮す。夜、塾の一年生を示字に集め、礼拝静坐。畢れば環坐して藪を供し閑談す。竹太郎も亦た之に臨む。

十三日 濃霧咫尺を弁ぜず。乍ち霽る。朝、二年生の為に社会学を講じ、畢る。樋口竹太郎来る。電気学を講ぜんことを囑す。之を道びきて示字に至る。一年生に臨みて之を介す。丹治来る。鬚髮尫々然として病久しき者の如し。曰く、今は富山に在り。友人知己少く、心に寂寥を感じ、東京に来らんことを欲し、先ず食料事情を察するなりと。余曰く、配給制は、遍く全国の人の用うる攸にして同じからざるなし。唯だ耕と不耕と、以て有余と否とを決するのみと。談中、山口氏に移去を告げんことを囑す。唯々として辞去す。四五日後復た来る。由子、郷貫に帰る。出牛君、村農を伴いて、耕地と運動場との境を定む。疲る。會たま佐藤少佐来り、立談す。少佐は余の為に火熱器拂下の事を済す。読みて印を求む。明日之を貴所に致さんと。家に帰れば、佐藤良智来る。喜ぶこと甚し。余之に謂いて曰く、

先日書を蝦名生に北海道に寄するに、測らざりきその日忽然と至る。今日巾櫛人去り、間髪を容れず、爾の至れるは天なり、幸なる哉。今夜泊り相い談せんと。佐生、余が身を按摩し、笑いて曰く、四年先生に接せず、按せず摩さず、力太だ衰う。恐らくは意に副わざらんと。余曰く、爾兵役に在ること三年、力を余すこと益ます大ならんと。

十四日 晴 冷し。昨夜寐ねられず数しば起き、念う攸を帖に記す。朝、書教通を作る。沖中教授・城田清明・坂口伸六郎・中川善次・田崎勇三の五名。宛名を為り、饗す。佐生をして沖中氏を訪い返書を乞わしむ。會たま平生来る。田崎博士を長原に訪ねしめ書を致さしむ。又市川薬局に就きて薬剤を購せしむ。又城田・中川・坂口三通の書は、郵に托して配達證明を為る。黒僮を召び書を佐藤少佐に致さしむ。黒僮、卵十顆を賚す。出牛・村農二名の者に命じ地を副さしむ。返り報じて曰く、三尺路以北は、地を九耕地に副して始めて明らかなりと。加藤正世君来り藪を乞う。余曰く、何ぞ早きや、余未だ饗せざるなりと。曰く、昨夜市川駅に泊りて以て来る。配給なきに苦しみて此の苦行を為すと。余道びきて芋を採り、且つ曰く、藪は大概採掘されり。鍬を以て掘ること深ければ則ち得んと。その言の如くす。宅間君その子をして、封筒及び用箋・土佐紙の頗る風流なるを贈る。余謂いて曰く、家に帰らば篤く敵君に謝し、余が喜ぶことの状を伝えよ。翅だ憾むらくは甘藷既に採掘を為し、残餘少く、鍬を以て之を採らば、或いは獲る攸あらんかと。その言の如くす。午後、加藤君辞去す。余問う、君経済学士若しくは商学士を識れるやと。曰く、僕の義弟、上田辰之助は商大教授たり。試みに有無を問わんと。君去る。樋口竹太郎来り、鯉・澤菴及び清子の制する菓糖を恵す。青僮を伴い境を巡り図を作る。殮は竹太郎と同にす。畢れば、蝦名賢造来る。之に竹太郎を介す。且つ曰く、今食了れり、更に食うべき物なきも、粥一杯、聊か以て飢えを凌がん。甘藷は量なし、以て食うべしと。佐生も亦た来る。余飯なきを苦しむ。青僮の婦曰く、飯は一杯に満たず。鯉あり菹を副え、之に藪を加うれば如何と。余已むを得ずと為して曰く、可なりと。二生泊る。余早く寐ぬ。竹太郎図を描きて筆を措かず。余その帰るを知らず。

十五日 晴 佐生昨夜知利紙ちりの所謂る櫻紙を恵す。余深く之を徳とするも、然れども余に於て過分なり。生の姉氏

に贈る故とす。蝦生飛行機上の鯛一苞を恵す。曰く、その毀つもの或らんと。余その得難きの物たるを知り、之を披くを惜しみ、藏して以て巾櫛人の返り来るを待つ。朝、二氣報じて云う、米國、神道を禁ずと。而も吾が政府解して曰く、所謂る禊なるものは避けざるべからず、神社の参拝も亦た禁ずべしと。余を以て之を觀るに、是れらの事、之を行いて何ぞ不可なる。祈禱と参拝とを混同して一と為す。所以に眼明を缺くなり。祈禱は是れ宗教、参拝は是れ道德なり。米國は宗教を禁ずるも、豈に道德を禁ぜんや。蝦生生徒の為に經濟学を講ず。新井宇平氏訪ねて曰く、昨日佐倉に泊り、今京に帰らんとし、大久保を過ぎりて先生を訪えるなりと。歛談之を久しくして辞去す。藍木少尉来り、電燈費を拂わんことを乞う。余曰く、当に之を高橋隊に乞うべきなりと。午後、阪口某来り、難じて曰く、足下の学を幸すること今の如くなれば、則ち余復た来たらざと。言辭不遜。余教員に接すること数十年、未だ嘗て此くの如く傲慢なる者を見ざるなり。余為に説う、生徒未だ悉くは来らず、教員未だ全くは備わらず。暫く待機し而る後行れと。某首肯す。余未だ嘗て此くの如き暴戻なる者を見ざるなり。某去る。余出でて廠を視、家に歸る。山本初男訪ね（来る）。是れより先き二女人来りて職を乞う。二三日後を約し、書を与えて之を去らしむ。夕、二年の塾生を集めて、小會す。

十六日 昨夜寐ねず。吾が頭岑々たり。晴 朝、生徒の為に神道及び日本人の心を用うべき法を講ず。又生徒に命じて疊を搬び、又几を搬ばしむ。佐生をして據屋に干物台を造らしむ。黒僧来り、頗る言あり、余笑いて之を退ぞく。二年生の為に社會学を講ず。家に帰れば愛子来る。鰻を饋る。客の坐して椅子に縁るあり。女人刺を持ちて来る。日高君、英語の人、矢島正治君を介するなり。君呢々として盡くさず。囑して講師と為し、研究科生の為に英文学を講ぜしむ。愛子と話し、頃くして辞去す。増淵子瀧来りて曰く、今夜宿直し、明日帰らんと。余之を難じて曰く、十八日の業を奈せん。留りて之を講ぜんことを乞う。不れば則ち余一人、何ぞ能く之を講ぜんやと。子瀧之に従う。佐生辞去す。夕、子米、紙を搬びて来る。爵を舎きて之を勞す。甚しき哉青慊の愚なる、今日海神邸に使いせしむるに、

返り報じて曰く、行きて今帰れり。余曰く、主人何をか言える。曰く、行かざるなり。大久保驛に至れば符を販らず。已むを得ず帰り来れりと。その言を知らざることを、憫れむべきなり。

(1) 一九四五(昭和二十)年三月の東京大空襲により、遠藤隆吉の巢鴨学園は、中学校・商業学校・経済専門学校のすべてが灰燼に帰した。学園の再建が当面の急務であった。この時、遠藤は病氣療養のため千葉県津田沼に居を移していた。そこには遠藤が私費を投じて買いいれた五・六万坪といわれる土地があり、かれの哲学である「生生示宇」の道場や教室が建てられていた。また広大な土地は都内の諸学校の共同練兵場にも使用され、学生たちの宿泊施設・食堂も用意されていた。終戦前後にはこの教室に軍隊も駐留していた。食料不足の折り、空地は耕やされ食べものが栽培されたが、この土地は荒地地で、サツマ芋と西瓜だけがよくできたという。

(2) ルビ及び()の内は筆者の補入による。また明らかな誤字は訂正した。

(3) 四男

(4) 不明

(5) 四女

(6) 姓氏不明。津田沼の広大な土地及び軍隊や練兵場関係の事務を司ったものと思われる。

(7) 隆吉夫人なつをいう。

(8) 長女光子の法名。一九二五年歿。

(9) 増淵瀧重。經專教授。学園の参事。

(10) 小川清太郎。經專教授。法律学専攻。

(11) 大越正秋。隆吉の姪の子。のち東海大医学部教授。

(12) 田崎勇三博士。巢鴨学園が癌研に近く、遠藤家とも個人的に親密であった。

(13) 不明

(14) 銭の異名

- (15) 張替家は津田沼で酒及び食品の店を経営し、同時に土地の顔利きでもあって、遠藤のこの地の土地購入に際して便宜を与えたとする。後出の「若大将」とあるのと同一人かどうかは不明。
- (16) 前橋は八月五日に空襲をうけるが、生家の神明町方面は災禍を免れる。
- (17) 岡本直次郎。経専教授。英語。
- (18) 八月九日の満州方面におけるソビエト参戦をいう。
- (19) 津田沼の用地内に駐留する部隊。米軍の東京湾上陸に備えてのものであろう。
- (20) 遠藤の「生々示字」と呼ばれる生々主義の哲学思想に基づいて建てられた修練道場。
- (21) 大正二年歿。三才
- (22) 八十八は米のこと、米作農家を指す。
- (23) 長男謙吉。昭和十一年以来、隆吉は巢鴨学園総裁に、謙吉は中学・商業学校長に就任していた。
- (24) 巢鴨から津田沼への経専移転をいう。九月に移転。
- (25) 巢鴨高商は、昭和十九年の学制改革により巢鴨経済専門学校と改称する。
- (26) 恐らく大越正秋の誤であらう。
- (27) 通称であらう。中に韓国人を含む部隊の謂であらう。
- (28) 青僚の誤。
- (29) 経専教授。国語担当。
- (30) 医薬品であらうが、品名は不明。
- (31) 黒田直竹。経専の校長事務取扱。
- (32) 不明。
- (33) 三男。昭和十六年三月戦死。中尉。
- (34) 樋口竹太郎。電気学を専攻。
- (35) 不明
- (36) ナトリウムを謂か。
- (37) 前出。注（20）参照。

- (38) 不明。
- (39) 八月三十日は靉、九月八日は魅と表記。いずれもマッカーサー元帥のこと。
- (40) 不明
- (41) 蝦名賢三。巢鴨中学校から浦和高校・東大経済学部卒。巢鴨経専教授、北大教育学部講師等をへて独協大学教授。著書に『遠藤隆吉伝——巢園の父、その思想と生涯』（西田書店・平成元年）がある。
- (42) 明治七（一八七四）年、遠藤千次郎・はるの長男として、前橋市神明町六一に生まれる。
- (43) 不明
- (44) 不明
- (45) 遠藤の哲学は生々主義である。これをパンタライ、万物流転と捉え、その法則にのっとって人は生きるべきだとし、これを英文で解説し、碑に彫りつけ、津田沼の「生々示字」の修練道場の傍に建立した。

(以下次号)